

サイバー空間とはなにか

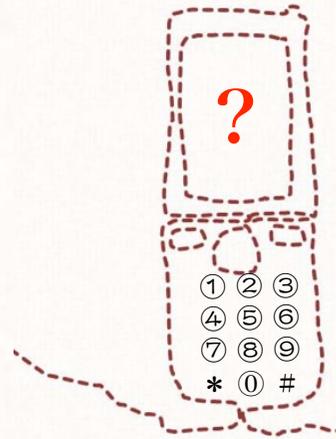
「タイ」というメディアもまた、こ
とばの容器物である。そのことば

拡大するインターネット空間もまた、今後新たな
蓄積や秩序を自生的に形成していく

—身体とメディアの社会学から



How to investigate the cyberspace : from the perspective of sociology



佐藤 健二 (University of Tokyo)

① サイバーということばの偏向

サイバー空間・サイバーセキュリティ・サイバーネットワーク.....／サイバーとサイバネティックス／ふつうに使っている概念が見方をしぼる／切断の必要

② 身体とAR・VRとの関係

どんな変容が起こりつつある？／（現）実空間？とサイバー空間？／人間の声＝ことばがつくりあげたのはVR空間だった／人間の拡張

③ メディアのエスノグラフィの必要性

ポスト「ゲーテンベルクの銀河系」／文字の文化／印刷革命とルネサンス／共有空間をどうつくるか／メディアはいかなる〈場〉をつくりあげたか

サイバー cyber-

- 他の語に付いて、インターネットが形成する情報空間（サイバースペース）に関連した、の意を表す。「サイバーセキュリティ」「サイバーテロ」 [デジタル大辞泉]
- 電脳, コンピュータ（ネットワーク）に関する、という意味の接頭辞。サイバネティックス（生物と機械の通信・制御機構の比較研究理論）を略したもの。近年語義が広がっている。「サイバネーション（製造過程のコンピュータによる自動制御）」など。 [外来語年鑑2000（現代用語の基礎知識）]

1-2. 「サイバー」と cyber

Cyber, comb.form

Chiefly prefixed to nouns. Originally: forming words **relating to** (the culture of) **computers**, information technology, and virtual reality, or denoting futuristic concepts. Later also: *spec.* forming terms **relating to the Internet**.

Cyber, adj

In predicative use. Of, relating to, or involving (the culture of) computers, virtual reality, or the Internet; **futuristic**.

[**Oxford English Dictionary**]

1-3. 原義としての cybernetics

Cybernetics, n

1. With **sing.** concord. The field of study concerned with communication and **control systems in living organisms and machines.**

1948 N. Wiener *Cybernetics* 19 We have decided to call the entire field of control and communication theory, whether in the machine or in the animal, by the name Cybernetics.

2. In extended use: the field of study concerned with the **integration of living organisms** and electronic or other **technological devices**; robotics. Cf. **bionics n.**

1959 J. Griffin tr. J. Rostand *Can Man be Modified* ii. 56 Intelligent people are wondering very seriously whether the robots of cybernetics do not present us with a valid image of life and of thought.

「われわれの状況に関する二つの変量があるものとして、その一方はわれわれには制御できないもの、他の一方はわれわれに調節できるものであるとしましょう。そのとき制御できない変量の過去から現在にいたるまでの値にもとづいて、調節できる変量の値を適当に定め、われわれに最もつごうのよい状況をもたらせたいという望みがもたれます。それを達成する方法がCyberneticsにほかならないのです。」 [第1版序文：岩波文庫, p.4]

「すでに確立された科学の諸分野のあいだにあるだけからも見捨てられている無人地帯」 [序章：岩波文庫, p.27-8]

「フィードバックの役割」 「自働制御」 「神経系」

「中枢神経系のきわめて特徴的なある種の機能は、循環する過程としてのみ説明できる」 [序章：p.39]

「制御工学と通信工学との問題が、たがいに切りはなし得ないこと、またこれらの問題が電気工学の技術のみに関するものでなく、むしろ通報 (message) という、はるかに基本的な概念に関するものであるということであった」 [序章：p.40]

「通信と制御と統計力学を中心とする一連の問題が、それが機械であろうと、生体組織内のことであろうと、本質的に統一されうるものであることに気づいていた。他方、われわれはこれらの問題に関する文献に統一のないこと、共通の述語のないこと、またこの分野自身に対する名前についてわれわれは熟考した結果、既存の述語はみなどこか一方に片寄っていて、この領域の将来の発展まで含めてあらわすには不適當であるという結論に達した。それでわれわれは制御と通信理論の全領域を機械のことでも動物のことでも、ひっくるめてCybernetics という語でよぶことにしたのである」 [序章：p.45]

人類史的 パースペクティブ

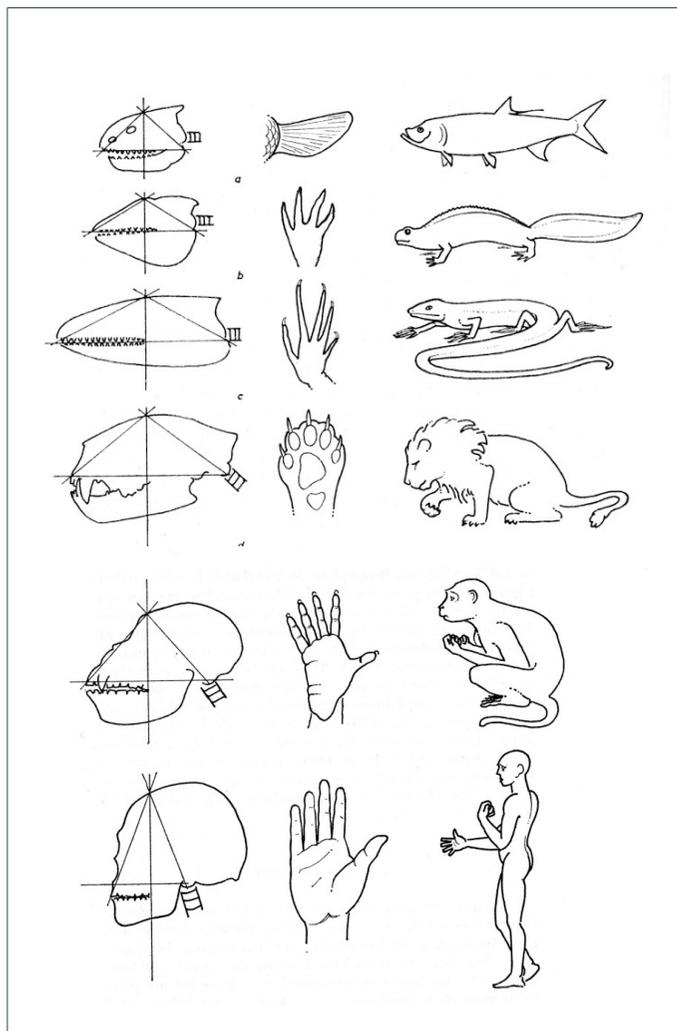


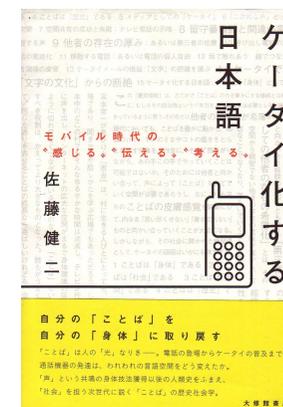
Figure is from Leroi Gourhan 1964 “Le geste et la parole”

人間の声は、身体を媒体としてつくりだされた。
それは人間という動物が進化を通じて獲得した原
初的でユニークな道具 (=媒体・メディア) である。

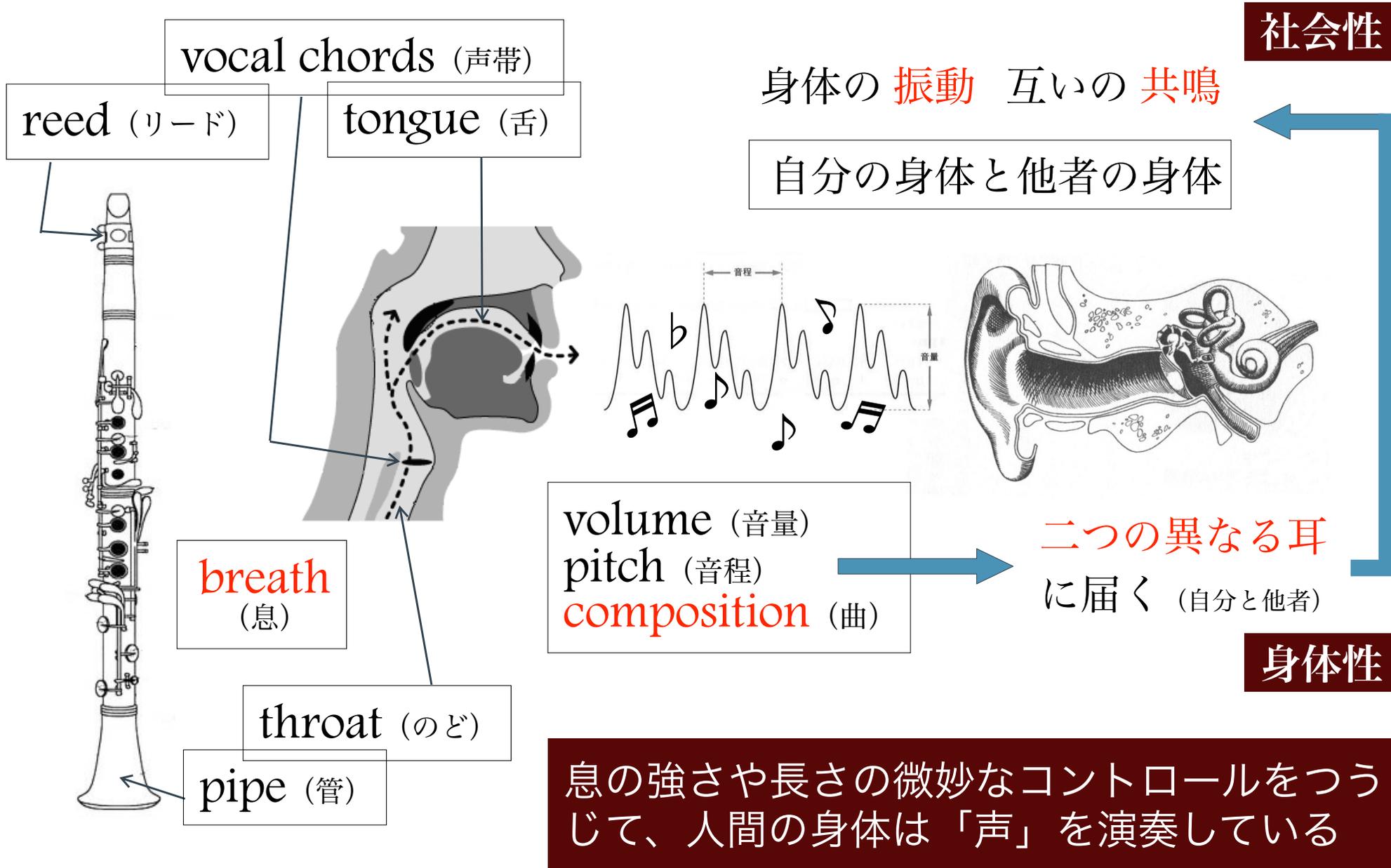
ことば=声 → もっとも基本的な VR・AR の世界
Syber(netic) space としての言語

ことばをとらえる 4つの枠組み

- (1) ことばは「身体」である
- (2) ことばは「空間」である
- (3) ことばは「社会」である
- (4) ことばは「歴史」である



2-2. 音楽としてのことば



社会性

身体の **振動** 互いの **共鳴**
自分の身体と他者の身体

volume (音量)
pitch (音程)
composition (曲)

二つの異なる耳
に届く (自分と他者)

身体性

息の強さや長さの微妙なコントロールをつうじて、人間の身体は「声」を演奏している

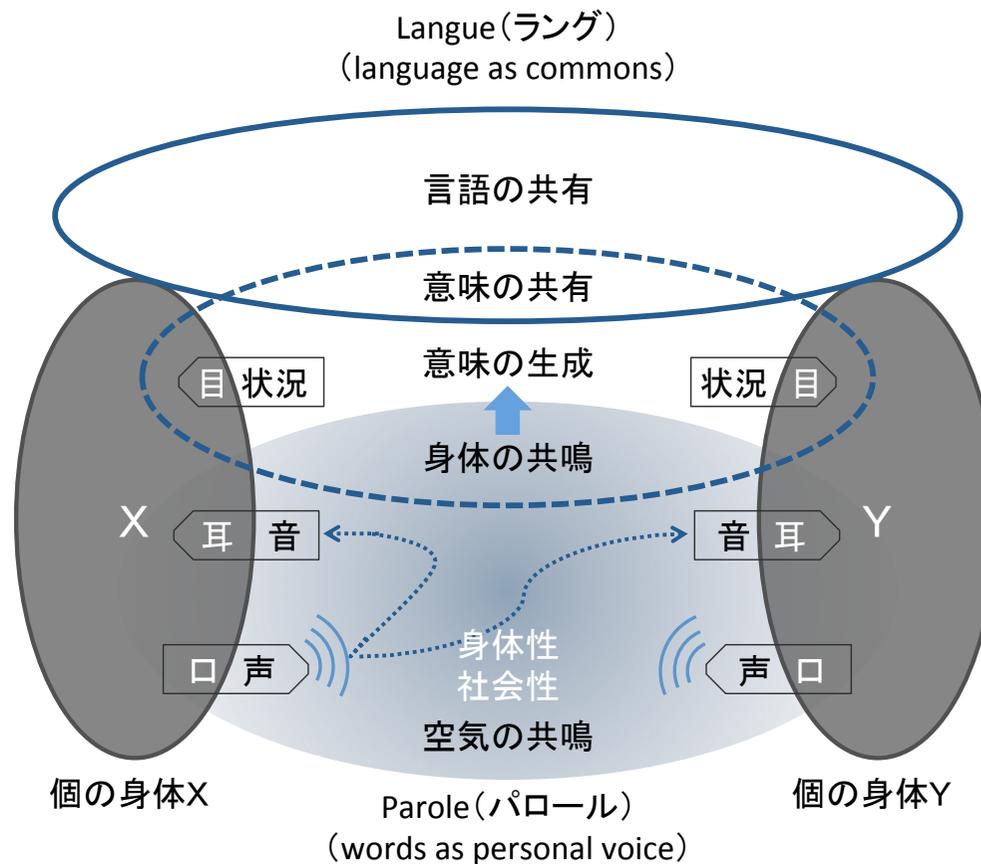
2-3. 声 と 空間としての言語

1) 共有されているもの：
空気の共振／身体の共鳴、
他者との共存／共有された
社会資本としての言語

2) 声の空間的特質：
一種の 共有空間 /
第三者や傍観者を巻き込む

3) 拡張された身体：
声は直接の身体性をもつ /
ことばは「**身体の拡張**」で
もある

Diagram 1



2-4. 拡張された身体として

① ことばはもうひとつの「手」である

伝達の機能／現実の手は「物体」をつかむ／ことばは形がない「イメージ」や「概念」をつかんで渡す／意識や意味を操作することができる

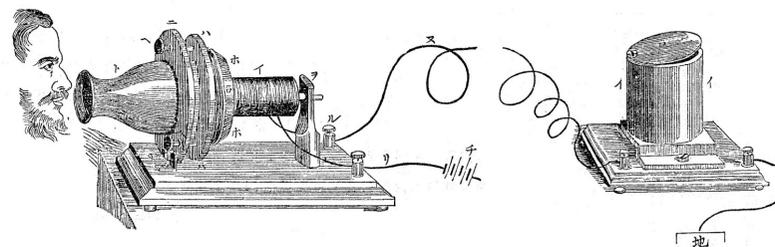
② ことばはもうひとつの「脳」である

思考の機能／ことばは記憶を引き出す索引／編集し、書きなおす／リストとして全体を把握する／新しい理念の構築／書くことで論理や分析を生み出す

③ ことばはもうひとつの「皮膚」である

感覚の機能／センサーとして／皮膚は環境世界と自己との境界／ひとは冷たいことばに傷つき、温かいことばに癒される／愛や悲しみをことばで感じ分ける

3-1. 電話空間のエスノグラフィ



メディアは空間を拡張する。その拡張は、つねに不均質である。
引き延ばす／ゆがめる／近づける／重ねる／切り離す.....
電話はいかなる空間を社会にインストールしたのだろうか？



複製技術のひとつであること
距離の感覚と経験とを変えたこと
「二次的な」声であったこと
「二次的な」身体性と社会性の関係



しかし「リアル／バーチャル」ではとらえられない質も

3-2. 分析の二つのポイント



他者との関係： 論点は**二つ**

1) われわれは電話で **想像された** 他者と話している。なぜなら相手は直接に **見えない** から。だから、この空間において生みだされた想像の形態は経験的な分析の対象となりうる。



2) 電話のコミュニケーションは、受話器をにぎる二者関係として分析されやすい。しかしながらこの分析枠組みは**第三者**あるいは傍観者の重要な役割を見落としている。そして、われわれの空間経験のなかに生まれた**他者との亀裂や距離感**を見落としやすい。



3-3. 見ることから切り離されて

1) テレビ電話のパラドクス：情報量と自然さ

2) 遠隔地中継における微妙なタイムラグ

3) 「もしもし」の呼びかけ：未知と緊急性

4) 「間違い電話」の示唆

5) 「留守番電話」の話しにくさ

6) 視覚が遮断されていることの自由

3-4. 他者との関係性をめぐって

「伝統的」な固定電話は、かつてさまざまな他者を巻き込んだシステムであった。たとえば、電話交換手の存在や「呼び出し電話」の習俗など。電話をかけるという実践は、あったこともない人と話さなければならないことを含んでなりたっていた。そうした経験は、敬語や外向きのことばの話し方の習得ともむすびついていていた。

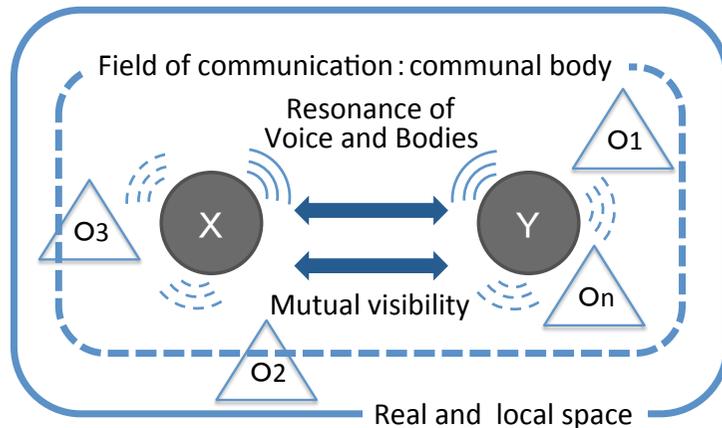
しかしながら、ケータイ電話の発達は、**直接に相手につながることを当然にし**、未知の他者とそのなかで出会い、交渉する経験を減らした。そうした社会的な原子化あるいは個人化は、人びとから **ことばの政治力** もしくはことばで交渉し、ことばでさぐる力を衰弱させたのではないか。

その反面において、**既知の親しい人びとのあいだはもっと親しく**、つねにつながっていることで安心をもたらすような共同性をもたらした。

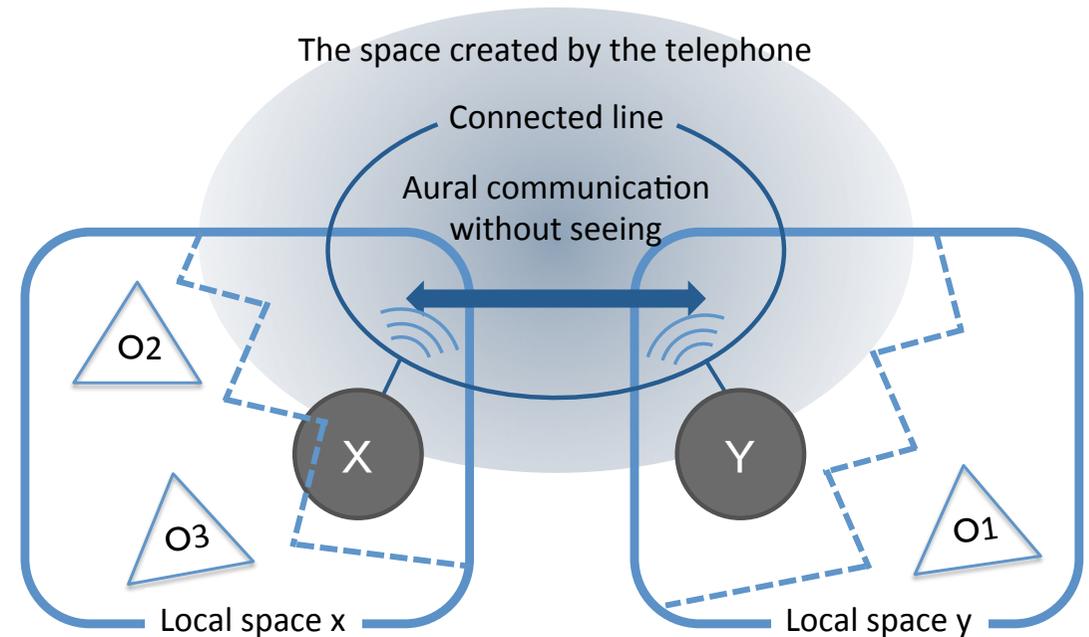
3-5. 第三者の存在の重要性

Model 1: space of the voice

もし第三者がただ聞くだけでなにも話さないとしても、空間を共有している。沈黙もまた意味あるものとして共有されうる。



Model 2: space of the telephone

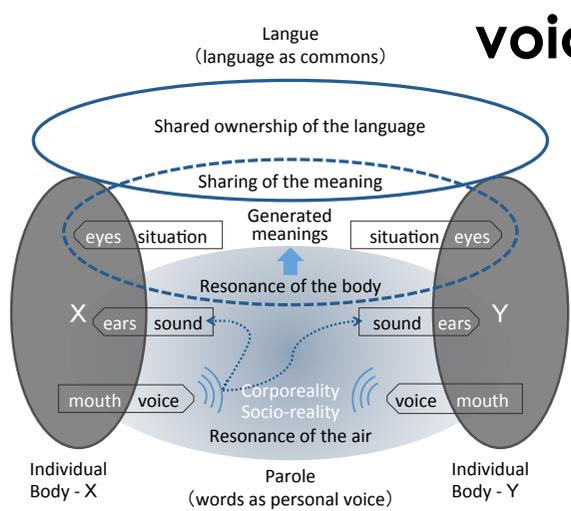


電話テクノロジーは、どこかコミュニケーションのとらえ方を二者間の関係に**限定**する。

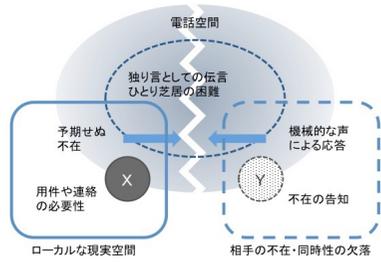
3-6. 他者の厚みの喪失

言語は人間という動物が進化を通じて獲得した根源的な道具である

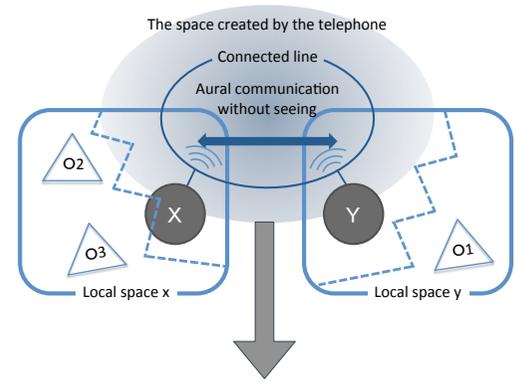
留守番電話や間違い電話にともなう
不機嫌・不快



想像が他者と共有される
空間の重要性



話すこと



telephone
第三者の排除
mobile-phone

もともと人間の「声」は第三者が巻き込まれる**共同体的な空間**を生み出す現象

互いの**身体の共鳴**という根源的な**社会性**を有する

"line" (線) でつながるバラバラな **自己**
第三者 の役割の縮小
他者の存在感覚の **Thinness** (衰弱・平板化)

4. もういちど、ことばに力を

ポイントは、コミュニケーションを支えている「想像の空間」の重要性。
そして、話すこと／聞くこと／書くこと／読むことを含むコミュニケーションすることが、ことばをつうじていかなる空間をつくりあげるか？

「他者の衰弱」や「公共性の喪失」という苦境を乗り越える力もまた、身体性に根を有し、想像力の翼をもつ「ことば」によって育てられる。それは技術の問題ではなく、ことばが関わる社会学的な課題である。

二つの問題。

新しいことばを工夫する想像力と、ことばを身につける力の衰弱。
すなわち新語を生み出す力が空洞化していることと、ことばを身体経験として学ぶ力が衰えていることである。

見えない、あるいはバーチャルな、もうひとつの「手／脳／皮膚」としてのことばの力の再発見に、あらためて期待するところもまさしくそこにある。



Thank you very much for your kind attention

